

## じーじの心配

松浦 俊博

札幌に住む娘には四歳になる可愛い男の子がいる。三歳で幼稚園に入ってからも、ほとんど言葉がでなくて私は心配していた。周りの園児たちの会話や行動についていけず、先生が気を使っていつも傍にいてくれる。娘は落ちついて「親の話すことはわかっているよ。話す時期が周りの子と違っていただけ」と言っていた。

七月に、孫は父親に連れられて。イタリアの南チロルにある実家に一か月間滞在した。三年ぶりなので、父親のご両親はとても喜ばれたようだ。娘は仕事で同行できなかったが、イタリアの実家と毎日スカイプしていた。また、孫の様子は、ビデオや写真で連日クラウドにアップされた。

実家は山の斜面に建ち、裏山に野菜を植えている。家の入口から玄関までの斜面には薪小屋や花壇もある。家の裏側には常設のバーベキューコーナーがあり、家族や友人が広いテーブルで食事できる。孫はみんなに可愛がられて本当にのびのびと過ごしていた。伯母たちが、近くの湖やプールや動物園に連れて行ってくれ、地域の子供たちと遊んでいた。祖母には切り紙を教えてもらい、また料理を手伝い褒められていた。イタリア語での会話の中で、孫は時折イタリア語か日本語の単語を言うこともある一方、歌うような返事をすることもあった。よく聞くと、言葉は出ないが会話のイントネーションをメロディとして歌っているようだった。

帰国時には羽田から私達の家に直行した。元気に夜遅くまで起きていたので翌日は時差ボケのため昼過ぎまで寝ていた。札幌に帰り、家からスカイプしてくれたら、なんと二つの単語から成る二語文を話しているではないか。ボキャブラりもずいぶん増えた。一週間ほどで幼稚園が始まると、園児たちに挨拶しているそうだ。まだまだ周りの園児には追いつけそうにないが、近いうちに会話できるかもしれない。

私は小さいころ体が弱かったせいか、親から「勉強しなさい」と言われなかったおかげで勉強嫌いにならずにすんだ。孫に「話しなさい」とプレッシャーをかけない娘の育児は適切だろう。